

信州読書会 ツイキャスト読書会

課題図書 カーソン・マッカーズ『結婚式のメンバー』

信州読書会では、毎週、ツイキャストをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャスト <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャスト読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャスト読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 37 回のツイキャスト読書会の課題図書は、カーソン・マッカーズ『結婚式のメンバー』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『結婚式のメンバー』 感想文

フランキーはぶっ飛んだ女の子で、そういえば赤毛のアンも子供の頃はぶっ飛んだ子だったなあと思いました。

フランキーは父親しか居なくてその父親とのエピソードもあんまり出てこなくて寂しいのかな？ と思いました。

途中で名前をF・ジャスミンに変えていて、フランキーという名前が気に入らないのかなと思いました。

私の父は前ぶれなく(私が見逃していただけたかもしれませんが)突然雷を落とす人だったので、子供の頃はぶっ飛んだ事もできず、真面目に過ごしてきた私としては少し羨ましく思う所もあるし、別世界のような気もしました。

でも、名前が気に入らないという所は共感できます。私も最近、やっと自分の名前が自分に合ってきたなあと感じてきましたが、子供の頃は何かおばさん臭くて好きになれませんでした。

芸能人の夫婦の二人の名前の漢字から取った名前なんて、自分がファンじゃないと好きになれないですよ？
(笑)

フランキーの名前を変えるというのは、どこか新しい所で、新しい自分になりたいという気持ちなのかもしれないなと思いました。

誰でも、今よりもっとステキな場所で、ステキな毎日を過ごしたいと思うから。

フランキーも、ぶっ飛んだ子供時代を経て、ステキな女性になってくれるのではないかなと私は思いました。

(おわり)

『世界って間違いなく突然なところだわ』

この小説を読んでいたら、急に、ブランキージェットシティというバンドの『[小さな恋のメロディ](#)』という歌が頭の中から流れて来ました。

歌詞は、

《行くあてはないけど ここには居たくない イライラしてくるぜ あの街ときたら 幸せになるのさ 誰も知らない 知らないやりかたで》

と、まあこんな感じなんですけど、行くあてのないフランキーの気持ちを理解できる人物が悲しいぐらい登場せず、話の噛みあわなさがキャッチャー・イン・ザ・ライのホールデン君のようでした。

僕もかつては、12歳だったのですが、読んでいる時は、フランキーの気持ちにはなかなか入っていかず、おい！おい！ジャーヴィス夫婦について行ったら邪魔だろうに、と、突っ込みながら読んでしまいました。

しかし、読後に僕もかつては、いじめられて孤立した時は毎日が苦痛だったな～と遠い記憶が甦ってきました。孤独や孤立って、慣れりゃいいってわけでもないけれど、なかなか辛いもんですよ。特に若いときは。

フランキーはピストルで自殺をするのを辞めたので、一分一秒の今が苦しすぎて、死のうかな、と悩んでいる人に、この本を捧げたい気持ちになりました。(何様だよって感じですが。)

この作品で一番好きなのは、女料理人ベレニスです。

なかでも、236ページのフランキーをなだめる場面で《あたしたちはみんな、多かれ少なかれ閉じ込められているんだ》

という文章が印象に残りました。

この本は、発売日に買っていたのですが、長いこと積ん読状態で、ずっと読みたかった作品であるにもかかわらず、いざ読み始めると読みづらいというか、なかなか話の展開も前に進まないの、楽な読書ではありませんでした。

絶版ですが『心は孤独な狩人』は凄くいい作品でしたので、『悲しき酒場のバラード』とともに村上春樹さんが元気なうちに翻訳して復刊してもらいたいです。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

結婚式のメンバー The Member of the Wedding カーソン・マッカラーズ 読書感想文

一度目を読み終えたとき、小さな共感はたくさんあるのだけど、フランキーと少し距離があった。

二度目に読んだとき、ベレニスとジョン・ヘンリーのおかげで、不器用なフランキーがいとおしく感じられた。同時にざらざらとした冷めた感性にぞっとした。

村上春樹さんの解説は素晴らしいのだけれど、作家の人生を知ってしばらく心が痛み、そしてまだ奥底でヒンヤリしている。

アメリカ南部の田舎町、1946年の世界情勢とは無関係に思えるほど静かな夏の風景は、けだるい熱気に占領されていて、どこかあきらめた気持ちの漂う町にフランキーはうんざりしている。苛立ちや焦燥感をぶつけるのは、家の台所。そこにはベレニスとジョン・ヘンリーが居る。フランキーのかけらは、大人になってもみんな持っているんじゃないだろうか。自分が自分じゃなければいいのと思う瞬間や、街が潰れてしまえばいいのにという妄想も。

「あたしたちはみんな、多かれ少なかれ閉じ込められているんだ。あたしたちはそれぞれいろんな具合に生まれてくるんだが、それがどうしてなのかわからない」
というベレニスの言葉は、静かな台所に刺さるナイフの跡。戦争と差別。心の孤独。彼女の人生の古傷がちらりと見えて、哀しみが伝染した。

文中、心に沁みるフレーズはたくさんあったのだけれど

**It happened that green and crazy summer when
Frankie was twelve years old.**

このはじまり方はとても好きです。英語はネイティブじゃないけど、ここは原文のまま何度も声に出してみた。

はじまりと終わりの歯切れの良さは、かつての自分を主人公にした作者からの、これからの人生の励ましのようにも感じた。

(おわり)

「わたし」と「わたしたち」の間

背が高い12歳の少女フランキーは、家の料理人ベレニスと6歳の従兄弟ジョン・ヘンリーと、お菓子を作ったりトランプをしたりと退屈に毎日を過ごしていた。

そんな中、フランキーの兄が結婚式を挙げることになり、兄とその奥さんに連れて行ってもらえれば、フランキーは今の閉じ込められた空間から抜け出せるかもしれないとたくらむ。

「わたしたち」と呼べる人がどこにもいないフランキーが、初めて「わたしたち」と言える兄とその奥さんを追って、結婚式のメンバーになるために、街を飛び出そうとして大人の階段を上る、気の触れたある夏の物語。

「ジョン・ヘンリーとベレニスという『わたしたち』が存在したが、それはどう考えても願い下げたい種類の『わたしたち』だった」(p. 86)

母親のいないフランキーにとってこの二人は、家族のような存在になっている。

フランキーはジョン・ヘンリーとベレニスとは一括りになりたくなかったし、されたくなかった。それは、この閉ざされた空間で過ごすことに嫌気がさしているし、既にベレニスは他の「わたしたち」を持っていて、一方でジョン・ヘンリーは「わたしたち」を一切持っていない。

フランキーも今まではジョン・ヘンリーと一緒にいた。自分の世界だけを生きる「わたし」。だが、成長するにつれ「わたしたち」を持っている人に憧れを抱く。ベレニスはハニーやビッグ・ママ、父親は店！

スポーツをやっておらず同世代に友人と言える人もいないフランキーは、行き場のない生きづらさを発散させることができない。

フランキーは献血も断られ戦争の中に入れず、世界が自分から切り離されていると感じる。父も相手をしてくれない。なんとか、兄とその奥さんには「わたしたち」を見出す。

結果はうまくいかなかったが、伸びすぎた背のフランキーは13歳になる。そこに大きな膝を持つジョン・ヘンリーや青い義眼を入れているベレニスはいない。畸形人間も見ないし、落書きされた台所の壁は綺麗になっている。3人は閉じ込められた空間から解き放たれる。だからもう泣けない。

(おわり)

「結婚式のメンバー」感想文

生まれた時から甘えられる母親がいない。父と兄はいるけど自分を認め共感し合える女友達も周りにいない。寂しい！ 孤独への苦しみと恐れを抱えた主人公の叫び声が聞こえてくるようでした。

そして、一連の奇怪な行動は、結局、この孤独感から起きたことが、話の最後の文 p319「心はさっと幸福へと切り替わり」ではっきりわかりました。

自分の価値を認めてくれる友達ができただけでフランキーは救われました。

それからこの本を読んで、人間の自由について改めて考えさせられました。

特に

p227 F ジャスミン（フランキー）「あなたはあなた、わたしはわたし以外のなにものにもなることができない」

p237 ベレニス「あたしたちは生まれながらに閉じ込められてる。黒人としても閉じ込められてる」

p241 F ジャスミン（フランキー）「この瞬間は二度と戻ってはこない。それを引き戻すことはできない。」

の言葉が印象的でした。

私は人間は出生時にある程度自由が決まっていると思います。大きく見れば人種、国籍で。自由を認める国か認めない国か。紛争をしている国か平和な国か。小さく見れば、家柄で。金持ちか借金だらけか。支配的な親かどうか。

自由を手に入れたくても出来ないことも現実にはたくさんあります。みんな不自由さを抱えながらなんとか我慢して生きています。

この話はそんな我々に必要なものを教えてくれました。それは不自由さを忘れさせてくれる存在。近くに寄り添い価値を認め合う愛する存在。ベレニスにとってはルーディー、フランセス（フランキー）にとってはメアリです。話の最後で、フランセス（フランキー）が幸せに向かって歩き出したので、私はほっとし、嬉しかったです。

また、ジョン・ヘンリーの突然の死は、無常さと共に、自由な時間は限られていることを感じ、したいことがあるなら、できる内にすることが大切だと思いました。そして、人間は互いに尊重し合い、自由に生きられることが幸せに繋がることを強く感じました。

（おわり）

『結婚式のメンバー』 読書感想文

根本的な問題である自分の「淋しい」という気持ちをフランキーは自覚できずに世界から疎外されていると疑心暗鬼に陥り毎日落ち着かず何もかも、受け入れられずイライラしています。不毛な会話を繰り返し、12歳という中途半端な年頃で方法も見出せずにいます。

結婚式のおかげで、目にするものすべてが自分に結びついて感じられます。驚きの感覚が反転したとあり、文字通り世界が一変します。町中に自分の歓喜を触れ回りたい衝動はとともヒステリックに感じました。

フランキーは環境を変え自分ではない何かになれば、何もかも解決できると考えます。

何かに取り憑かれ、夢中になっている間は、躁状態になり多幸福感に包まれますが、それに失望すると極端に走り、何もかも憎らしくなって、やけっぱちな気分になってしまいます。

「あたしたちは《生まれながら》に閉じ込められている、その上黒人としても閉じ込められている」幸せな一時期、閉じ込められているという意識は消えますが、結局は閉じ込められたままだと、世の中の不条理を語るベレニス。

「人々はばらけながら同時に縛られている、縛られていながらばらけている」

何かしらの一員になることを強く求めるフランキーですが、この矛盾した繋がりに不安定さを感じて、しっくりくる言葉をさがします。全てを識ろうともがくフランキーに自分たちがわかる範囲には限界があるとベレニスは諭します。

どうしても自分を好きになれず、その都度改名し、七転八倒する12歳の少女の姿は危なっかしくて、痛々しく、ハラハラしましたが、よく考えるといい年になった今の自分もフランキーの要素が十分に備わっていると思いきりぞっとし、フランキーの将来がフランス映画の「ベティブルー」と重なりました。私は何とか目をそらしながら生き長らえてきましたが、真正直な為、精神崩壊し若くして逝ってしまった「ベティブルー」のベティの方がもしかして正常なんじゃないかと思う自分もあります。

(おわり)

『ベレニスへ』

人はどこから来て、どこへ行くの？ どうして私は私で、あなたはあなたでしかないの？

私はF・ジャスミン。明日私の人生が変わるの。私は兄の結婚式で、兄と兄嫁の真ん中に立ち、二人のハネムーンと一緒にいく。そしてこの街には二度と戻らないの。大嫌いな庭も、気の触れたような絵が描かれた台所もさようなら。明日去ると思うと、街のあらゆるものと私の間には言葉にしがたいつながりが生まれているように感じるの。世界が違って見えるのよ。もう私のこと、誰にも止められやしない。

けれど、ベレニス。私のこの壮大な計画にあなたという人は水を差すのね、なんて残酷な人！ ああベレニス、あなたはどんな人生だったの？ ルーディーを失って、第二第三のルーディーを追い求めて傷つき、とうとう片眼が青いガラス玉になってしまったのに、そこまでして生きてるって、なんでさ？ そして私を長い腕に巻きつけてこう言うの。「あんたの言わんとすることは、おおよそだけわかるよ」。

結局、結婚式は散々だった。結婚式からつまみ出された私は、何としてでも、いっそあの忌まわしい赤毛の兵隊と結婚してでもこの街を出られるなら手段を選ばないはずだった。なのに、このとおりにぶざまにもここにいるわ。

みんな、あのホテルに集まる軍人のようにどこからか来て、やがて私の前から去っていく…ジョン・ヘンリーさえね。彼はあっけなく逝ってしまった。今ではあのけだるい夏のひとときがまるで宝石のように感じられる。あなたは言った。「あたしたちはみんな、多かれ少なかれ閉じ込められているんだ。」私は、これからも変わらず閉じ込められたリアルを生きて行く。やりきれない思いに耐えられない時は、ジョン・ヘンリーと3人で泣いたあの午後に思い出すかもね。

私よりも過酷な鎖に繋がれている筈なのに、それを感じさせない独特の包容力であなたは私をつつみ込む。『灰色の目はガラスの目』ジョン・ヘンリーが例えたように、あなたには私の目の奥に見えているものがすべてお見通しってわけ。あなたはひよっとすると、私にとっての知性、私がこれから知るであろう世界の、すべてを手中に収めたい世界の、そのすべてかも知れない。

そのことに少し気付いたのに、あなたは去ってしまう。寂しいけれど、お別れね。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 ほどけない かたまり 』

私は、十二歳が多感で大事な時期だということは知識として知っている。「知識」として…としたのは、私が十二歳をあまりにフランキー的に過ごせなかったからだ。早生まれなので、中学一年の頃だ。クラス、部活、地域、習い事…等、ガチガチに何かの「メンバー」であり、目の前のことを消化することで精一杯だった。確かに、果てしないエネルギーはあったけれど、それが内観に向かう余裕がなかった。逆に、何かのメンバーでない自由に憧れた。あまりにも、さらっと通り過ぎた思春期を思うと、フランキーの足掻きが眩しいのだ。

無所属の孤独に苛まれるフランキーは、一番身近な「家族」というメンバーの兄の結婚にぶち当たる。兄が新妻と新しいメンバーを形成することで、さらに取り残される焦燥感に駆られ、夫婦プラスワンの関係になろうとする。それが、どんなに奇妙でも、フランキーにとって最後の砦なのだろう。彼女は、「自分の中に生じるこのかたまり」を解きほぐすことができず、「何か」をしようとする。

年齢を経た今ならわかる。その「かたまり」は大人になっても解きほぐせない。ただ、この「かたまり」を無視したり、気づかないふりをする術が身につくのだ。初めて、この「かたまり」に対峙する十二歳としては、正面からぶつかってしまうのだろう。どうしても、兄夫婦と「我々」と称するものを持つことに固執して、ベレニスとジョン・ヘンリーという家族同然のメンバーを軽視してしまうフランキー。大人になっても、身近にある「大切なもの」には気がつかないのだから仕方ないのだけだ。

幼い時と違い、自らが何者かがうっすらわかってくる十二歳。そうなるとフランキーの「自分でない何か」になりたい焦りは、万国共通だ。これから、時間をかけて、ゆっくりと自分と折り合いをつけていくしかない。ただ、めくるめく思春期を過ごせなかった私としては、フランキー目線でもう一度、破茶滅茶な十二歳を疾走した気分だ。真っ只中のフランキーは辛いだろうけど、足掻きはしておくに限る。こう思うということは、ありきたりの大人になっちゃったな、私。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『気の触れた夏を、生きのびて』

「あたしたちはみんな、多かれ少なかれ閉じ込められているんだ。あたしたちはそれぞれいろんな具合に生まれてくるんだが、それがどうしてなのかわからない。でもいずれにせよ、あたしたちは閉じ込められている。(中略) そしておそらくあたしたちはみんなもっと広いところに飛び出して、自由になりたがっているんだろう。しかし何をしたところで、あたしたちはやはり閉じ込められたままだ。」 P236

この世に生まれてきたのは、車の衝突事故みたいなもので、国家と「あたしたち」の多重玉突き事故を、ジャン＝ジャック・ルソーは『社会契約』と名づけ、運転者のみんなの意志を「一般意志」と名づけた。生まれた場所と、生まれてしまった「あたしたち」との出会い頭の事故が、人の一生を強く支配している。

ひょっとすると、岡本かの子の『鮎』の「ともよ」も、あの夏を、湊のおかげで生きのびたのかもしれない。

ともよは、自分自身を杭根のように感じた。そして福ずしの常連客を、彼女の杭根の苔を食む、鮎のように考えていた。常連客の湊だけが、鮎ではなく、一風かわった鰻魚だった。湊だけが、ともよの杭根の刺さっている力を見つめていた。ともよは、湊に見つめられると『自分を支えている力を暈(ぼか)されて危いような気がした』

ベレニスを脅したナイフ(P75)の刺さっている力は、この杭根の内部の力と同じものだ。しかし、ベレニスの義眼では、フランキーの支えている内部の力を、捉えきれない。

没落した旧家に生まれるのは、生まれる以前の根源的な意志の要請だ。

湊は母の握る鮎によって、生きのびた。

南部の旧家の血を引くフランキーには、鮎を握ってくる人はいなかったし、そもそも本当の母親が、この世界の何処かにいるという着想すら持ち得なかった。その代償として、フランキーは、あれほどまでに「結婚式のメンバー」という着想に固執したのだ。旧家の没落のトドメとして、従兄弟のジョン・ヘンリーが連れらされたので、フランキーは生きのびた。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343